

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2015年12月20日

[テーマ] 夜泣きの次男と待望の散歩

ようやくこの時がやってきた。この時をずっと待っていた。次男の夜泣きである。ずっと泣いているので親が眠れなくなる。そんな赤ちゃんの夜泣きは親にとって有難くないものであるはず。それなのにどうして待ち遠しかったのか。

長男誕生から2か月弱が経った昨年6月、親子3人の生活が始まった。米国での単身赴任生活は終わったが、私は慣れぬ仕事で毎日遅く家に帰り着くと、いつも長男が泣いている。自分が抱いても、泣き止まないどころか、泣き声はむしろ激しくなる。

そこで仕方なく、日中の世話で既に疲れ切っている妻に長男を託し、自分は別の寝室に向かう。でも、すぐに眠りにつける訳ではない。子どもを授かって幸せなはずなのに、抱き方もあやし方も分からず、気分が落ち込む毎日。

ある夜思い立って、長男を抱いて自宅の外に出た。その時、泣き声が少し収まった気がした。そこで、そのまま少し歩いてみた。東京の下町を目的地のないまま小一時間歩いて、自宅からそれほど遠くない場所に子育て地蔵があることに気付いた時、長男はすやすやと寝息を立てていた。起こさないように、お地蔵様に手短なお礼をして、急いで家に向かった。適度な運動をしたせいか、その夜は自分もよく寝ることが出来た。

以来、長男との夜の散歩は私の日課となった。育児に初めて貢献出来たことが嬉しかったので、仕事が忙しい中でも出かけた。実は泣いていない時にも出かけていた。今としてみると、夜中に赤ちゃんを連れまわすことを近所の人々はどのように思っていたのか心配になるが、その時は私なりに一生懸命であった。夏の寝苦しい夜を経て、外の空気が肌寒くなってきた頃、いつの間にか夜泣きは終わっていた。

今年7月に前橋市の産院で生まれた次男は、群馬の空気が合うのだろう、いつも機嫌が良く、夜泣きなどしない。妻に抱かれて微笑む顔は可愛いが、私の出番は入浴する時のほか、爪を切る時と鼻水を吸引する時くらい。いずれも次男が嫌がることであり、私の腕の中で微笑むことなど殆どない。

そうした中、ようやく先日、次男が夜泣きをした。私は待っていましたとばかり、彼を抱いて外に出た。外に出た瞬間に泣き止んだのは、長男の時と同じ。ところが、次男は寝てくれない。それもそうだ。長男の時は夏であったが、今は12月。空っ風が我々を襲っ

てくる。次男に風邪を引かせてはいけない。自分も風邪を引いてしまうかもしれない。結局、初めての次男との夜の散歩はごく短時間に終わった。そんなことで気分が落ち込むことはなくなっていたが。

後日、ある方にこの話をしたら、赤ちゃんが泣いた時には歩くのではなくて、ドライブするのですよ、車の揺れで気持ち良くなってすぐ泣き止みます、でも赤ちゃんが癖になってしまうので困りものです、とのことだった。こうやって車が好きになっていくのか、やっぱり群馬はクルマ社会！

〔 日本銀行前橋支店長
 神山 一成 〕